

補章

{ 34 }
日
本

遊びをせんとや生まれけん

大岩川 嫩

遊び好きは子
どもも帝王も

古来、無邪気なこどもの遊びから、厳しい生活に息抜きを求めるおとなの遊びまで、身分・階層を問わず日本人の暮らしに遊びの要素は欠くことができない。

「遊びをせんとや生れけむ、戯れせんとや生れけん、遊ぶ子供の声きけば、我が身さへこそ動がるれ」(参考文献(1) 巻第二、三五九)

十二世紀の末、後白河法皇が平安朝末期の流行歌「今様」を集めて編纂した『梁塵秘抄』のなかにあるこの一節には、遊び好きの日本人の心の弾みが生き生きと躍動している。

なわとび、石けり、かくれんぼ——と童謡の歌詞に唱われるものを代表として、日本における伝統的な戸外での子ども遊びは、数人からはじまるものが多かった。現代なら学齢前の幼

児から高学年の学童まで、年齢の違う子どもたちが一緒に群れをなして遊ぶことも可能なのが、こうしたグループ遊戯の特色であった。そしてこうした素朴な遊びは、多かれ少なかれかなり古くから子どもの世界に伝承されてきたものと思われる。右の今様の情景から聞こえてくる子どもの声も、きつとそういう遊びに夢中になっている京童の幼い声々であつたろう。

しかしその無邪気な子どもたちも成長してくるにつれて、楽しみ方に問題も出てくる。

「わが子は二十に成りぬらん、博打ばくちしてこそ歩くなれ、國々くにの博黨ばくちやうに、さすがに子なれば憎にくかなし、負まかいたまふな、王子の住吉西の宮。」（同前三六六）

同じ『梁塵秘抄』には、博打に身も心も奪われて、諸國を放浪してわが家にもよりつかない、大きくなったわが子の身の上を嘆く母の心も謡われている。この子はおそらく十代の少年の頃に家を出てしまったのであろう。母親は、もうあれから何年、と指を折って数え、今年は二十歳になったはず……まだ博打して放浪しているのだらうけれど、それでもわが子ゆえ、博打運が好いようにと神仏に切なく祈ってやっているのである。ギャンブルにうつつを抜きし家出する現代のハイティーンの親の心と変わりはない。この今様が採録されていることは、平安期にもすでにこうした社会現象が顕在化していたことを示すものだらう。まことに、遊びが度を過ぎると近親の嘆きとなることは古今東西に共通することではある。

この『梁塵秘抄』を編纂した後白河法皇（一二七一—一九二）は、平氏政權から鎌倉政權

への移行期に「治天の君」として院政を執り、初期の武家政権と拮抗する古代勢力の主である政治家としても大きな役割を果たした人物である。しかし、一方では皇位に就く前の十代のころから異常なほどに今様に熱中して、身分の高下を問わずあらゆる歌い手を集めて歌わせ、自らも三度も声を潰すほど歌って六十歳代のいまに至ったということを、この書に詳しく書き残している。現代の日本に生きていたなら、さしずめカラオケ大王というところでもあろうか。

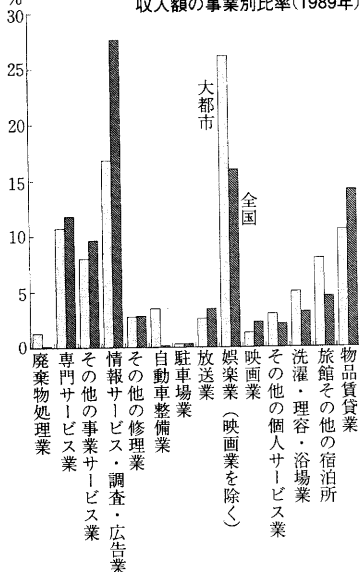
一家でクラシック音楽をたしなむ平成の皇室の祖先としては、型破りの君主であった。

産業化した娯楽

いま、娯楽は、経済大

国となったわれわれの社会で一大産業としての位置を占めている。その点、前章までの途上国のなかにはまだ「娯楽」が産業

図1 営利的サービス業における収入額の事業別比率(1989年)



(注) 収入総額は、全国=80兆7490億2400万円、
12大都市=41兆2556億5300万円。

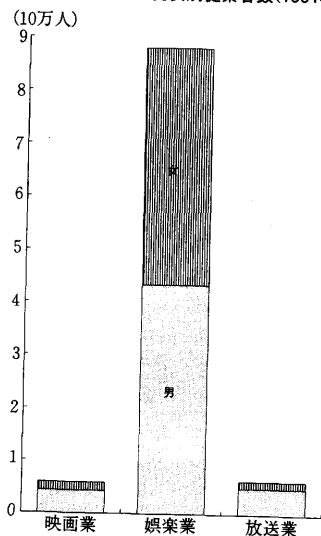
(出所) 参考文献(2)より作成。

化しているとは言いがたい国もかなりあったのとは著しい違いをみせている。

試みに、サービス業の全貌について現在最もまとまった統計資料として入手できる『平成元年サービス業基本調査報告』（参考文献(2)）によって、その趨勢をみてみよう。なお、ここでは、日本標準産業分類（昭和五十九年改正）の「大分類サービス業」のなかで、民営の営利的サービス業（サービスの提供区分で一般消費者からの収入割合が三〇%以上の事業所）を対象としてみることにする。さらに、ここで「娯楽産業」としてとりあげるのは、そのなかの①映画業、②娯楽業（映画業を除く）、③放送業、の三つの中分類とする。これは、前章までの各論がこれらを「娯楽」として位置づけて展開していることに照応するものである。

営利的サービス業全体の収入規模は一九八九年に全国で八〇兆七四九〇億二四〇〇万円であったが、そのなかで、この三分類の収入は計二四兆二五四八億一六〇〇万円であり、サービス業全体の約三

図2 娯楽産業の男女別従業者数(1991年)



(出所) 参考文献(3)より作成。

○%を占めている。そしてその内訳では②の映画業を除く娯楽業（以下、たんに娯楽業とする）がずば抜けて大きく、サービス業全体の二六・一二%を占めている。ことし一九九四年度の国家予算原案（二月十日発表）の一般会計総額が約七三兆一〇〇億円であるのと比較しても、その規模の大きさがわかるだろう。これらの様子を、一二大都市（札幌、仙台、東京都区部、横浜、川崎、名古屋、京都、大阪、神戸、広島、北九州、福岡の各都市）の場合を添えて図にして見たのが図1である。

娯楽産業は、いまや日本経済のなかでその雇用する約一〇〇万人の就業人口（図2）とともにますます大きな存在となろうとしている。

新しい娯楽「カ

ラオケ」の勃興

では、娯楽業をさらに細分化した内容をみよう。この小分類には、劇場・興行場、興行団、競輪・競馬等の競争場、競輪・競馬等の競技団、運動競技場、体育館、ゴルフ場、ボウリング場、テニス場、ゴルフ・バットイング・テニス練習場、公園、遊園地、遊戯場、マージャンクラブ、ぱちんこホール、その他の遊戯場、その他の娯楽業という区分があるが、その発生年次が新しく、かつ近年急速に伸びたカラオケは残念ながら独立の分類項目となっていない、その他の娯楽業のなかに含まれて集計されている。

別の統計（参考文献③）を加味して、娯楽産業の事業所数の推移をみると図3でわかるよう

図3 娯楽産業の事業所数の推移 (1954～91年)

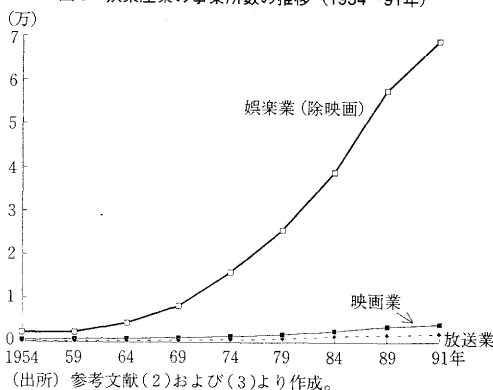
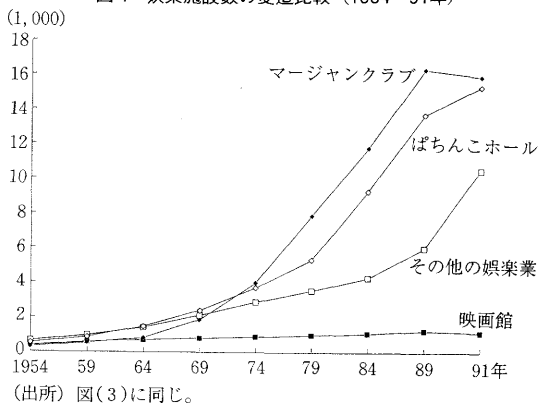


図4 娯楽施設数の変遷比較 (1954～91年)



に映画・放送業のそれは際だった伸びを示していないにもかかわらず、一九八〇年代以降の「娯楽業」の急激な増加は当然そのなかにこれらの新しい娯楽を加えてのものである。

さらに映画館・ばちんこホール・マージャンクラブ・その他の娯楽業の四種で娯楽施設数の変遷比較を試みたのが図4である。すでにテレビ時代に産業としての凋落を終えてほぼ横ばいの映画館数、高度成長期の娯楽産業にふさわしい伸びを示して急激な増加曲線を描くが、近年は退潮しつつあるマージャンクラブやなお増加趨勢にあるばちんこホールのそれと比較して一九八〇年代後半からの急激な上昇機運を示す「その他の娯楽業」は、きたるべきカラオケ時代を予感させるものである。

別の資料（参考文献(4)）から、総務庁による一九八九年十月以降の全国のカラオケに関する調査結果を図示してみよう（図5）。この図でわかるように、第一回の調査時点では全国で一四九七カ所だったカラオケ設置カ所数は、四年後の九四年六月には一万五一七カ所と、七倍以上に増えている。また、同じグラフに一〇室単位としたカラオケ・ルーム数の推移も示してみたところ、九一年を境としてルーム数の増加趨勢が施設数のそれを上回っていることがわかる。つまり、ボックスルーム型のカラオケが増えたということであろう。最近もまだ周囲にカラオケボックスの新規開店を目にすることからも、この趨勢は続いていると思われる。現に筆者の居住する中央線武蔵境の駅前通りでも、古い歴史を持つ家電の店がカラオケボックスに衣

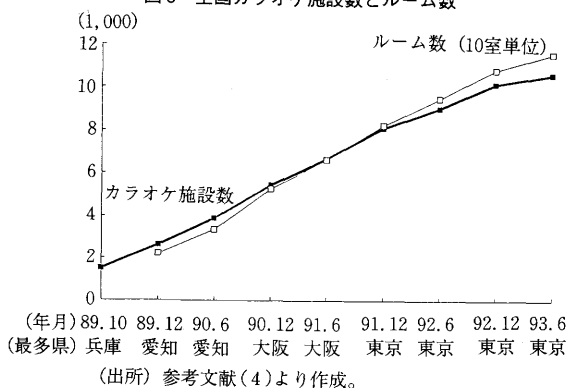
替えしてしまった。

なお、同じ調査によるカラオケ施設の設置数の最多県と最少県をみると、面白いことがわかる。最多県は「兵庫↓愛知↓愛知↓大阪↓大阪↓東京↓東京↓東京↓東京」と、カラオケの流行が関西方面から始まって東京方面へと東遷しているようにみえることである。そして、最少県は「徳島↓高知↓高知↓高知↓高知↓山梨↓山梨↓高知」と、特定県にとどまっているようだ。最終時点では、最多・東京一二四カ所に対し最少・高知は五カ所で、全国都道府県の平均は二三四カ所弱である。

カラオケ誕生の背景

こうして日本を発祥の地とする「カラオケ文化」は、あつという間に燎原の火のごとくに海外諸国に広がった。本書の韓国をはじめとする各国の章でもその様子が述べられている。この爆発的流行にびっくりしているのは、音痴の故にその圏外にいる筆者ばかりではない。昨秋のある週

図5 全国カラオケ施設数とルーム数



刊誌の「外の目」というページに、ジョージ・フィールズ（ペンシルベニア大学客員教授）は日本の庶民文化を説明するのには漫画とカラオケが一番だ、と述べた上でカラオケについて次のように書いている。

「カラオケは自然発生したのか、あるいはどこか（の）創造性あふれる天才が発明したのか。まずそれを知りたい。……推測でしかないが、こう考えた。まず、ひところ、日本の重役は料亭でのお遊びで、芸者さんの三味線伴奏で粋な小唄や都々逸を披露したものだ。オーストラリア政府の視察団として来訪し、……感銘を受けたのを思い出す。……二十数年前の日本の社長たちは粋な江戸文化を守っていたのだ。下町のその料亭は今はない。そのギャップをボトムアップで埋めたのがカラオケなのだろうか。確かにサラリーマンたちはひそかにカラオケ修行して公の場で披露する。でも、お座敷の小唄とはあまりにもかけ離れている。……」（『サンデー毎日』一九九三年十一月十四日号）

この疑問に答えるような説を、野中耕一アジア経済研究所理事から聞いた。同氏によれば、カラオケの勃興と正比例して衰退の一途をたどったのは料亭よりも、かつてビジネス戦士たちの明日の戦力を鼓舞したキャバレーであり、いまやキャバレーの衰微は滅亡の域に達している、とのことである。キャバレーは概して男性中心の遊び場だったのに、カラオケは男女ともに楽しめる場であり、この変化は職場における女性進出とも無関係ではあるまい。

カラオケファンの人々の話を聞くと、ストレス解消にこれに優るものはないという。得意の家電・オーディオ・エレクトロニクス技術による機器の開発と庶民文化の歌謡曲との結合による「創造性あふれる天才」(ジョージ・フィールズ)の発明によって、世界へカラオケ文化の流行を発信した日本の娯楽文化の果たした役割は大きいといえよう。

歌に心の悩み
を託す庶民
もともと日本の庶民は喜びにつけ悲しみにつけ歌うことが好きである。さきに、後白河法皇が「今様」に熱中したことに触れたが、このときの今様の流行を支えていたのも無名の民衆であった。

喜び・悲しみにつけ……と述べたが、考えてみるとどちらかと言えば悲しいとき・苦しいときの方が民衆の歌への渴望はより大きいような気がする。『梁塵秘抄』の時代は、律令制国家が崩壊過程にあり、戦乱、飢饉、疫病などが打ち続き、人々は釈迦入滅後、正法・像法の世の後に訪れた末法の世として恐れおののいた不安定な世情だった。

筆者の子供時代は戦争中だったが、親元を離れた集団疎開の宿舎で、娯楽といえは集まって「お山の杉の子」などの童謡、「アツツ島玉砕の歌」などの軍歌、「花摘む野辺に陽は落ちて……誰か故郷を思わざる」などの流行歌を声を合わせて歌うことだった。

はるかシベリヤ抑留の敗軍の兵たちも酷寒の地で「異国の丘」などを歌って励まし合い、ダモイ(帰還)の日までの辛い強制労働の日々を堪え忍んだ。

いまもなつかしのメロディーなどでよく歌われ、老年になった人々が苦しかった戦後生活のころを振り返って涙ぐむスタンダード・ナンバーには、「リンゴの歌」、「青い山脈」など窮乏時代を慰めた明るい歌があると同時に、原爆症で死んで行く永井博士をうたった「長崎の鐘」、「星の流れに身を占って……」焼け跡をさまよう哀しい女性の心を映す歌等々、心をえぐる悲しい歌も多い。長く日本の大衆に圧倒的な支持を得ていた演歌の特徴が涙だといわれるのも象徴的である。美空ひばりなど、大スターもこうした戦後の社会相のなかから生まれた。年末のNHK紅白歌合戦が「国民的行事」と化したのはようやく日本経済が高度成長期に入ろうとするテレビ時代の幕開けのころからだったろうか。

そしていま、カラオケが隆盛を誇るようになってかえってテレビの歌番組は退潮傾向にあり、かつてのような大スター時代も去ったようだ。誰でもがカラオケ機器のおかげでプロの伴奏つきでみずから歌い楽しむことができるようになると、人々はスターに感情移入する受け身の視聴者から自己陶醉に身を委ねる能動的な歌い手に変貌を遂げてしまったようである。

パチンコは娯 楽産業の王者

さて、事業収入の面に立ち帰ってみると、娯楽産業の最大のものはなんといってもパチンコである。第二次大戦後の大衆娯楽として生まれたパチンコは、何度かのブーム期、退潮期と盛衰の波は被ったが、その都度ゲーム機器の技術革新や業態の経営革新で乗り切り、着実に伸びてきた。そして、バブル景気が終息し平成不

況の始まったここ二、三年にも不況知らずの盛況だという。前記の統計では一九八九年現在のばちんこホールの事業収入総額は一五兆二七一二億三三〇〇万円で、そして五年後の今日では一七兆円産業とも言われている。これに比べ、映画業全体の事業収入は一兆五九六億二九〇〇万円（八九年）と、その約一四分の一でしかない。同じくゴルフ場は一兆三三〇五億五〇〇〇万円である。まさにアウトドア・インドアを通じての日本の娯楽産業の王者の位置にあるのはパチンコゲームだといえよう。

パチンコファンは二〇〇〇万人とも三〇〇〇万人とも言われる（参考文献⑤）その盛業の要因は、単なる手軽な遊びというだけでなく、やはり景品を換金できるというその射倖性が庶民の生活のなかに根をおろしているのであろう。景品の換金は本来風俗営業法の規定により違法だが、実態としては大きなパチンコ店の近くには景品交換所があつて、客はそこでライターの石、ネクタイピン、シャープペンシルの芯などの「特殊景品」を換金できるというシステムができており、大半の客はそれを利用、警察も黙認してきたという状況が続いている。

しかし、パチプロといわれるような熟練者は別として、パチンコ愛好家の庶民一人ひとりにとってはささやかな小遣い銭での楽しみであり、せいぜいがその日の食いつ持稼ぎの程度にすぎないこのギャンブル性も、ここに集散する巨額な現金に目を付けた暴力団の資金源としては大きな意味をもつて機能してきたようだ。警察庁の試算では、一九九三年、「都内で暴力団が

景品の買い取りなどに関与しているパチンコ店は八四三店で、約一五〇億円が暴力団側に流れて」という（「パチンコ景品商品券が浮上」、『朝日新聞』一九九四年二月二日付記事）。さらに九〇年、脱税防止策としてパチンコ店にプリペイドカードシステムの導入を推進してきた（九四年初頭現在普及率約一〇％）警察庁は、最近、この暴力団の介入を排除するための改善策を検討している。その具体案は、警察庁が九三年六月に設置した諮問機関・生活安全研究会による「特殊景品」を全面禁止して、そのかわりにプリペイドカード、商品券、ビール券などの有価証券の提供を認めるというものである。が、このパチンコ改革案も業界団体の日本遊戯関連事業協会、全日本遊戯事業協同組合連合会への打診段階で業界は賛否両論入り乱れて騒然となり、なかには警察や大企業がカード会社などを通じてパチンコ業界の利権に食い込もうとしていると非難する向きもあるようだ（①同上記事、②「パチンコ利権（一七兆円）に群がる警察・暴力団・大企業の仁義なき戦い」、『週刊現代』一九九四年二月二十六日号）。

いずれにせよ、「不況知らず」のパチンコ業の巨大利権あつてこそその騒動であろう。パチンコ店に「いづれぞ無縁であつた筆者などからみれば、庶民の娯楽の殿堂が暴力団の資金源や脱税の温床となることはもとより好ましくないが、過度に透明性を追求することはゲームの面白さに水をさし、庶民の足を遠ざけるようなことになりかねない」という一部の批判が果たして正鵠を得ているのかどうか見守りたい。その射倖性についていえば、公営の競輪・競馬に比べれば身

を減ぼすようなギャンブル性はないようだ。勤め帰りのサラリーマンの気分転換、家事に倦み
疲れた主婦の息抜き、老人の退屈しのぎや時間潰し等々、パチンコ業の隆盛はドラッグやい
ゆる風俗営業の跋扈に比べればはるかに健全な遊びであろう。

サッカーくじは 射倖性といえ、いまひとつ最近になって浮上してきた問題に、サッカー
実現するか？ は当初の予想を超えた熱狂的な人気が青少年を中心に集まっているが、こ

れを対象として、スポーツ振興財源のため、という大義名分でサッカーくじを創設しようとい
う運動が、共産党を除く超党派の国会議員で組織する「スポーツ議員連盟」によって議論され
始めているのである（「サッカーくじ論戦」開幕、「朝日新聞」一九九四年一月十七日付記事）。

日本オリンピック委員会（JOC）と日本体育協会の「国民の自発的な支援による新たなシス
テム」によるスポーツ振興資金を、との要望を受けての構想という。まだその是非の決着はつ
いていないというが、今後国民世論を巻き込んでの是非の論争が大きくなっていくだろう。は
やくもこれが実現した暁には予想される二〇〇〇億円ともいわれる売上金の市場をめざして水
面下での銀行など金融機関の白熱した争奪戦が展開しているともいわれる（「サッカーくじ二〇
〇〇億円市場で五大銀行の争奪戦早くも過熱！」、「週刊ポスト」一九九四年二月十一日号）。

しかし私見では、スポーツ観戦が金銭と絡むことには、なにか不健全なものを予感する。二

週間分一二試合の予想をもとにして、的中率は宝くじ並みの確率にというが、なぜサッカーだけが対象となるのかという疑問も生じよう。野球は？、相撲は？ということにもなる。競馬や競輪などと異なり、より国民なканずく青少年に普遍的な意義をもつスポーツに目先の金ほしさでギャンブル性を導入することは、スポーツ精神の建て前が泣くのではないか。外国でもやっている、というのが推進派の論拠であるが、近年社会問題化してヨーロッパやラテンアメリカの諸国が手を焼いているサッカー観衆のフリーガン化なども、このくじが実施されれば日本にもたちまち飛び火するおそれがある。近代スポーツとしてのサッカー少年育成という裾野をもったＪリーグ人気を、そうした危険性にさらしたくないという気がする。

変貌する室内

ほかにも娯楽産業の分野で取り上げるべきことは多いが、省略して室内遊戯の問題に移ろう。

ゲームの世界

一九七〇年代後半から八〇年代のひところ、インベーダーゲームの大流行を皮切りに次々とコンピュータ制御のゲーム機器が登場し、それらを集めたゲームセンター、いわゆる「ゲーセン」が街のあちこちに出現し、青少年の人気を集めた。まだそれらの店はある程度の命脈を保ってはいるものの、昔日の勢いはない。どうしてかといえば、その後個人用のゲーム機器とソフトの開発によるファミコン、パソコンゲームが発達し、こうしたゲームの遊びは街頭から家庭の中に入ってしまったから、という説が有力である。街のそうした店に足

を踏み入れたことのない筆者なども、手持ちのパソコンでは「テトリス」、「上海」等々いくつかのゲームには手を染めている。電子おもちゃ箱時代の遊びである。

では、家庭のなかに伝承されてきた遊びは、いまどうなっているだろうか。その代表として、正月の家族揃っての遊びとして江戸時代以降伝承されてきたカルタ取り——なかでも「百人一首」の世界をみてみよう。

藤原定家（一一六二—一二四二）撰と伝える小倉百人一首は、万葉集から新古今集の時代までの百首の和歌を、上の句から読み札とし、下の句を取り札として源平二組に分かれて取り合う室内競技である。この競技は、正月の家庭ゲームの王座を占めていたばかりでなく、親戚、知人、友人などが大人も子どもも打ち交じって遊ぶことのできる得難い社交性をもった遊びでもあった。尾崎紅葉作の明治時代の小説『金色夜叉』は貫一・お宮の悲恋物語として名高いが、女主人公の宮を金満家の富山が見初めるのは作品冒頭の正月三日、歌留多会の席上であり、ダイヤモンドをきらめかせる富山の富豪ぶりに反感をもつ青年たちが歌留多取りにことよせて、かなりな乱暴を働くというシーンもある。明治三十（一九九七）年一月一日から読売新聞に連載された新聞小説であったから、正月気分のなかで読者に相当のアクチュアリティをもつてアピールしたものと思われる。ここでは、百人一首の場が、一種のお見合いの役割を果たしている。当時、百人一首は新聞をとっているような家庭ではどこでもやっていた遊びであった。都

会ばかりではない。その十年ばかり後に石川啄木がやはり東京毎日新聞に連載した小説『鳥影』（明治四十一年十一月初―十二月末）にも、岩手県の農村地帯で、なんと真夏の季節に歌留多会の趣旨で村の資産家宅に集まった帰省中の大学生、小学校の女教師ら知識層の青年男女が交歓する様子が描かれている。階層差はあるにせよ、百人一首文化は全国に広く普及していたのである。

昭和一桁生まれの筆者の場合は、北海道在住の幼い頃から両親・きょうだいと共に遊ぶ百人一首がお正月のなによりの楽しみであった。母を先頭に、妹や弟たちと熱中したものである。父はたいいてい読み手に回った。高校、大学時代の友人たちも大半はこのゲームに親しんでいたところが、近年気がつくのと、現在の次の世代にはどうやらこの遊びは余り受け継がれていないようである。職場の若い同僚たちに聞いてみても、「おばあちゃんは、やってたようだけど……」とか、「学校で古文の時間に習わされた」、「うちに組札はあったけど、あれでやるゲームは坊主めくりだとばかり思っていた……」などという答えばかりが返ってきて、ついぞ自分も好き、ないし子どもと一緒に現在遊んでいるという人には出会えなかった。

かつて熱中した筆者のきょうだいの家庭でも、その子どもたちは礼儀として付き合ってくれ、という程度にしかこの競技に興味を示していない。そして、やはり「学校で」教わっているのである。テレビゲーム、ファミコンなど、かれらの関心を惹く室内の遊びは概して一人遊

びのできるものであり、グループでの競技は不得手のようでもある。

学校で教える、というののもどんなものだろうか。この百人一首にはもちろん秀歌も多いが、古来どうしてこんな歌がといわれる歌もまじっている。それゆえこれを定家の発した一種の暗号メッセージと見立てる「百人一首の謎」解き著作さえいくつか現れているほどであり、国語の教材としてさほど適当とも思われない。おそらく、この伝統的な遊びを通じて和歌の世界に親しませようという狙いがあるものと思われるが、かえって現代の子どもたちが百人一首にそっぽを向くのは、学校で教えられることにうんざりしたせいもあるのではないか。やはり家庭で意味もわからないところから競技に参加してしだいに覚えていくほうが遊びへの興味は増すであろう。いずれにせよ、この伝統ある正月の遊びの伝承は、もはや普通の家庭では断絶の運命を迎えているようで寂しい。

*

しかし、見渡せば、囲碁・将棋などの伝統的な遊びもまだまだ根強く生き残っているし、アウトドアでは水中ダイビング、ゴルフの大衆化、観光旅行・海外旅行の一般化等々、日本人の遊び志向はますます健在である。そして、遊び上手の若者たちばかりでなく、働き蜂としてろくに休暇もとらず、人生の余裕も遊びも知らないと指弾された世代の人々もようやく余暇を過ごし得る年代となり、多様な遊びの世界はよりいっそうの広がりを見望しつつある。アジアを

はじめ外国の人々とも遊びの世界での交流がもっと大きくなっていくだろう。遊びをせんとや生れけむ……日本人の遊びが、これからも老若男女ともに心豊かに生きる喜び、幸せにつながるものとして暮らしのなかに息づきつづけていくことを願いつつ、紙幅の尽きたこの稿を終わることにする。

〔参考文献〕

- (1) 佐佐木信綱校訂『新訂・梁塵秘抄』、岩波文庫、一九五六年版。
 - (2) 総務庁統計局編『平成元年サービス業基本調査報告』第一巻・全国編、総務庁統計局、一九九一年。
 - (3) 総務庁統計局編『平成三年事業所統計調査報告』第一巻・全国編・その1、総務庁統計局、一九九二年。
 - (4) 『月刊・レジャー産業資料』一九九四年二月号、総合ユニコム。
 - (5) 『月刊・レジャー産業資料』一九九三年四月号、総合ユニコム。
- ほか。

(お問い合わせ ふたば／アジア経済研究所広報部主幹)